

研究報告

新生児の“泣き”に対する看護学生の気づき —新生児モデル(育児体感マイベビー)での育児疑似体験演習をとおして—

佐原玉恵, 岸田佐智

徳島大学医学部保健学科看護学専攻

要旨 本研究の目的は、看護学生が新生児モデルを使用して育児疑似体験をすることによって学生にどのような気づきがあるのか明らかにすることである。演習としてA大学医療技術短期大学部3年生の母性看護学実習期間中に、新生児モデルを使用して育児疑似体験を行った。その演習時に提出された学生のレポートの中で、新生児の“泣き”によって自分の感情がどう変化しどのような学びとなったかに関して記述してもらった。本研究の参加に同意した40名の学生のレポートについて気づきに関する内容を質的に分析した。その結果【泣きからわき起こる不快な感情を味わう】【育児の難しさを実感する】【泣きの理由と意味付けを考える】【泣きに対処するための方策を考える】【世話をし泣き止むことで愛着を感じる】【自分の中に母性意識が芽生える】【母親の気持ちを考える】【周囲のサポートの必要性や重要性を感じる】の8つのカテゴリーが抽出された。8つのカテゴリーからは、新生児の泣きによる学生の感情の変化についての内容、泣きの演習を通じて母親理解が深まっていた内容、看護者としての役割についての内容が導きだされ、今後の実習指導に役立てることができると考えられた。

キーワード：新生児の泣き、育児疑似体験、気づき、看護学生、教育

はじめに

近年少子化が進み自分自身が子どもを産むまで小さな子どもに接したことがない女性が増加している。看護学生においても同様で、母性看護学実習を経験するまで新生児、乳児に接したことがない学生は多い。したがって実習で目の当たりにする妊娠、出産、育児に関する現象が初めての体験となる場合が大半である。そこで対象者が体験する現象と同じ内容の演習を行い、その体験から自分自身の感情や気づきについて洞察し、感性を豊かにすることは、対象理解を深めるためには有効と考える。

多くの学校で、体験学習は実習を効果的にするということが高齢者体験、患者体験学習等が行われるようになった。母性看護学領域では、以前から育児技術の一部

である沐浴などはモデル人形を使用して体験学習を行ってきた。濱口¹⁾らが妊婦疑似体験を行うことにより学生が妊婦への看護の理解を深める上で有効であったと報告しているように、妊婦疑似体験もよく実施されるようになった。しかし育児疑似体験の報告は非常に少なく、岡田ら²⁾が5名の看護学生を対象に行ったものしか見られなかった。

西海ら³⁾は、育児に関するストレス要因の中でも産後2～3週の時点では、児がしょっちゅう泣いて機嫌が悪い、夜間よく泣く、なぜ泣いているのか分からないなど泣くことの問題をあげている。また“泣き”からくる睡眠不足などを認知している母親は、認知していない母親よりも状態不安得点が高く、新生児の“泣き”に関するストレス要因について述べている。このように、児の“泣き”は育児の中でも母親にとって最も大きなストレス要因になっており、学生が児の“泣き”に対する演習をすることで、新生児の特徴や母親のストレスについても理解が深まり、その体験から学生が自分自身の感情や気づきを冷静に観察することによって学生自身の看護者とし

2007年8月31日受付

2007年10月19日受理

別刷請求先：佐原玉恵，〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15
徳島大学医学部保健学科看護学専攻

ての資質を高めることになると考えられた。

看護学生を対象として“泣き”がプログラムされている新生児モデルを用いて育児疑似体験を演習し、その演習を通じて看護学生にどのような感情や気づきが生じ、どのような学びとなったのかについてまとめてもらった。この一連の育児疑似体験の演習を通じて得られ学生自身の気づきを分析し、その内容を明らかにすることを本研究の目的とした。

用語の定義

育児疑似体験：授乳、排気、あやす、おむつ交換等を要求する“泣き”に関するプログラムが内蔵されている株式会社高研の育児体感マイベビー（T-5055）を使用し、約1時間の新生児モデルへの育児を行うことである。

気づき：育児疑似体験を行なっている間に自分自身の中で生じる感情や思考について自分で発見すること。

方 法

1. 演習の方法

1) 演習のねらい

新生児の“泣き”に対して世話をするという育児疑似体験を通して新生児やその母親への理解が深まることをねらいとした。

2) 対象

A 大学医療技術短期大学部看護学科3年生76名

3) 学生のレディネス

学生は、母性看護学の講義による学習をすべて終了している。6ヵ月間にわたる各領域の臨地実習を行っている段階で、その中の母性看護学臨地実習中である。

4) 演習の時期

母性看護学臨地実習は4週間あり、その期間中に演習を行った。つまり、実習期間の初期に演習が行われた場合から後期に行われた場合がある。このことは病棟・外来実習を行う前に演習を行った学生と、病棟・外来実習を終えて演習を行った学生がいたことを意味する。

5) 演習の実施方法

新生児モデル（育児体感マイベビー・T-5055・株式

会社高研）（以下モデルとする）を使用して育児疑似体験をする。今回は練習モードという設定のプログラムを選択し、学生はマニュアルにそって演習する。

演習の進め方は、まず教員がモデルの使用法を説明する。次に、学生自身の演習によって感じる“泣き”に対する感覚を大切にするため、モデルの電源を入れない状態で教員がデモンストレーションを行った。学生2名がペアとなり1体ずつモデルを使用し、約1時間の演習を行う。学生が育児疑似体験を行っている間、教員からの介入はなかった。

学生は、演習を行った後、新生児の“泣き”に対して世話をするという行為によって起こる自分自身の感情や気づき、演習を通して学んだことについて800字～1000字程度で自由記述したものをレポートとして提出した。

2. 本研究の方法

1) 対象

A 大学医療技術短期大学部看護学科3年生76名の中で、本研究に同意した学生。

2) 調査期間

平成14年5月から12月

3) データ収集方法

演習時に、過去の育児体験やきょうだい数、児に関するイメージ、感想等の質問紙を配布し、それを演習のレポートとした。そのレポートを評価後、返却時に、本研究の目的、趣旨について説明し、了解の得られた学生のレポートの内容をデータとした。

4) 分析方法

①学生の育児の体験の有無や、きょうだい数等に関しては、記述統計による分析を行った。

②学生の自由記述部分を気づきについて質的に分析した。分析対象とする記録単位は、書かれている文章の意味内容を正確につかむため1文脈を1記録単位とした。記述内容で類似性の高いものを集めてコード化しさらに類似性のあるものをまとめ、カテゴリー化しネーミングしていった。

5) 研究の信頼性・妥当性

研究者は分析対象となるデータを何度も読み、書かれている意味内容を忠実に理解するように努め、カテゴ

り分類を繰り返した。さらに分析の妥当性を高めるために2名の研究者間で意見の一致がみられるまで分析を繰り返した。

6) 倫理的配慮

研究目的と趣旨、協力内容等についての説明は、演習の評価終了後レポート返却時に行った。これは、研究への使用の有無がレポート内容に何らかの影響を与える可能性を考慮したためである。書面と口頭によって個々に説明し、研究協力の是非は個人の自由意志に基づいて決定され、協力者は署名を持って同意とし、同意の得られた学生のレポートをデータとした。

結果および考察

1. 対象者の背景

看護学生76名のレポートのうち、同意の得られた40名(50.3%)のレポートを分析対象とした。対象者の背景としては、きょうだいがいないものは40名中4名(10.0%)、2人のもの40名中17名(42.5%)、3人のものは40名中13名(32.5%)、4人のものは40名中5名(12.5%)無回答が1名であった。

また、身近に赤ちゃんがいたことがあるものは40名中28名(70.0%)であり、過去に赤ちゃんの世話をしたことがあるものは40名中21名(52.5%)、であった。世話をした内容は、食事の世話が最も多く11名、あそぶが10名、おむつ交換が9名、抱っこが8名であった。赤ちゃんのイメージとしては、かわいい、小さい、やわらかい、よく泣くなどがあった。

2. “泣き”に対する学生の気づき

データは154にコード化された。分析の結果、【泣きからわき起こる不快な感情を味わう】【育児の難しさを実感する】【泣きの理由と意味付けを考える】【泣きに対処するための方策を考える】【世話をし泣き止むことで愛着を感じる】【自分の中に母性意識が芽生える】【母親の気持ちを考える】【周囲のサポートの必要性や重要性を感じる】の8つのカテゴリーと24のサブカテゴリーが抽出された(表1)。

以下カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、学生の記述を「」で表記する。

1) 【泣きからわき起こる不快な感情を味わう】

【泣きからわき起こる不快な感情を味わう】は、モデ

ルが泣き止まずにイライラしたり、泣き止まないことで学生自身も泣きたくなった、また泣きやまない児に対する自責の念に駆られるといった内容であった。サブカテゴリーは《泣き声にうろたえる》、《泣き止まずにイライラする》、《泣きたい気分になる》、《泣く児に対する自責感》の4つが抽出された。

《泣き声にうろたえる》では、「今回の実習で気づいたことでは新生児が泣くという行為に自分自身うろたえる部分があるということだった」「新生児の泣くという行為は自分自身にとって不安にさせたり落ち着きをなくしてしまうものだなと今回の体験をしてみて感じた」「なぜ泣いているのかわからない時は色々考えあらゆることを赤ちゃんにやろうとしていた。自分自身がまだ産んだこともなく世話に関してまだ未熟なのでどれがいま赤ちゃんにしてあげるべきことが判断できないので動揺した」と、新生児の泣き声が学生自身を不安な思いにさせることを冷静に分析していた。

《泣き止まずにイライラする》では、学生は「児のケアを進めていくごとに児がなぜ泣いているのか分からなくなって困ってしまい、イライラしてしまうことがあった」「大きい声でずっと泣かれたりすると最初の方は我慢できていてもだんだんイライラしてきて頭痛がして来た」と述べており、モデルが泣き止まないことでいらいらしていた。

《泣きたい気分になる》では、「泣かれるとすごく困るとつくづく思った。私まで泣きたい気分になった」「初めてこの人形を扱ったので泣き止まなくてどうしていいのかわからなかった。自分の方が泣きたい気分だと感じました」と、モデルが泣き止まず自分も一緒に泣きたいと感じていた。

《泣く児に対する自責感》は、「演習の途中から赤ちゃんが泣き止まないのは自分のせいで自分が悪いんだとさえ思ってしまった」という風に、学生が自分の思ったことをいろいろと試してみても、モデルが泣きやまないと自分を責め、自責の念に駆られていた。

このカテゴリーに含まれる記述が最も多く、学生は泣きによって不快な感情を引き起こしていた。泣きに対して不快感を抱き、不安になり泣きたい気分になり、自分を責める学生もいた。一方で泣きについて不快感、焦りを感じながらも自己の心情を冷静に分析し、不快感がある中で自分なりに適切であると考えた対応ができる学生もいた。通常は、泣きに対して困惑やイライラの感情が先行しがちである。したがって、実習指導の際には、

表1 育児疑似体験演習を行った看護学生の気づきの内容

カテゴリー	サブカテゴリー
泣きからわき起こる不快な感情を味わう	泣き声にうろたえる
	泣き止まずにイライラする
	泣きたい気分になる
	泣く児に対する自責感
育児の難しさを実感する	泣く原因を理解することの難しさ
	実際の育児の大変さを想像する
	育児行為の難しさ
	将来の子育てに対する不安
泣きの理由と意味付けを考える	赤ちゃんの泣きの意味を分析
	泣きによって母子関係を作る
泣きに対処するための方策を考える	泣きへの対応・対策をとる
	心のゆとりを持って対応する
	育児指導を行うための医療者としての心構え
世話をし泣き止むことで愛着を感じる	世話することで泣き止み安心
	世話することで泣き止みかわいい
自分の中に母性意識が芽生える	児に対する愛着の芽生え
	育児に対する自信
	将来わが子をもつことへの期待
母親の気持ちを考える	母親にとって育児はつらいものだとして理解する
	母親として成長する
周囲のサポートの必要性や重要性を感じる	友人のサポートの重要性
	家族のサポートの必要性
	経験者や母親同士の助け合いの必要性
	社会のサポートの必要性

“泣き”に対して冷静になれない学生には新生児の生理や新生児の扱い方について学習した上で、具体的な援助方法の指導を学生の理解度に合わせて行い、実習場面ではそばでサポートする必要がある。またこうした泣きに対する不安、困惑等の感情は母親でも同じように感じるものでありそのような母親に対してどのような援助があるか考えさせるには良い機会であると考えられた。

2) 【育児の難しさを実感する】

【育児の難しさを実感する】では、なぜ泣くのかその原因を理解することや育児行為の難しさ、大変さ、さらには自分の将来を予測し不安に陥っている内容であった。サブカテゴリーは、《泣く原因を理解することの難しさ》、《実際の育児の大変さを想像する》、《育児行為の難しさ》、《赤ちゃん中心の生活に対する難しさ》、《将来の子育て

に対する不安》の5つのサブカテゴリーが抽出された。

《泣く原因を理解することの難しさ》として、学生は「新生児に泣かれると、泣いているどうしよう、どうして泣いているんだろうとあせってしまう。今回はモデルなので簡単に泣き止んでくれたが本当の新生児だったらこんなにうまくいくはずがなく、何をしても泣き止まないといった場面があるはずである」「身体面もそうだが泣きの原因を見いだせない時はかなりの疲労を招くがこれが積み重なると育児ノイローゼになるのだろうかと思った」という記述をしており、泣いているモデルに対して泣く原因を見つけることが難しいと実感していた。

また《実際の育児の大変さを想像する》では、「本当の新生児は、ミルクの次が排気のために泣くとは決まっていなくて泣いたときどう対処すればよいかわからなくなるだろうなと思った」「人形だったので首の角度

や抱き方に気をつければそれで泣き止んでいたけど本当の赤ちゃんだったらこんな風には行かないだろうなと思いました」と述べており、実際の育児は大変だと感じていた。

「新生児の要求はおむつが気持ち悪い、暑い、不快などシンプルなものである。しかしそのシンプルな要求を満たしてあげることは簡単なことではないのである。ここに子育ての難しさがあるのではないかと感じた」「ミルクを与えるとき片手で新生児を支えもう一方の手で哺乳瓶を持ち不安定な状態になるのが怖かった。新生児モデルは人形なので動かないけど実際の新生児はばたばた手足が動くので難しいと思う」より、《育児行為の難しさ》を感じていた。

《赤ちゃん中心の生活に対する難しさ》も感じていた。実際にモデルでの演習を行う中で「赤ちゃんは泣くことでしか自分を表現できないとわかっていても何回も泣かれると自分の行っている活動を一旦中断してしまわなければならないとなりストレスがたまってしまうと思います」「トイレに行きたい時に行けなかったりと赤ちゃん中心の生活になってしまい自分の休まる時間もないように思った」とあり、赤ちゃんとの生活を想像し、その難しさを実感していた。

演習とはいえ、突然に母親役割を演じなければならぬので「実際赤ちゃんができてしまって育児をしなくてはいけないと思うと自分自身が育児を放りだして何もなくなってしまうのではないかと怖くなった」とか「児が泣くことに対して愛着を持って世話する親もいれば逆もいるっていうことを実感しました。自分は元々子どもは嫌いなので児の世話を放棄してしまう気がしました」と述べる学生もあり、自分の《将来の子育てに対する不安》を感じていた。

育児の難しさについては実際の演習をすることにより想像していた以上の大変さがあったと考えられる。長時間育児しなければわからない赤ちゃん中心の生活についての困難さを理解し、自分の思い通りにものごとが進んでいかないらだちや不安を感じていた。子育てしている母親への理解が深められる一方で自分自身の将来についてマイナスのイメージをもっている学生もいた。演習で行った泣きの体験が将来のトラウマにならないように実際の実習の場面では新生児の反応のかわいらしさや母子の相互作用の様子を見せ、褥婦から児に対する思いを聞くなど受け持ち事例をとおして経験させる必要があると考えられた。

3) 【泣きの理由と意味付けを考える】

【泣きの理由と意味付けを考える】では、新生児が泣くということにはどういう意味があるのか、泣くことが母子関係にどういう影響があるのかということを生徒なりに分析していた。このカテゴリーは、さらに《赤ちゃんの泣きの意味を分析する》、《泣きによって母子関係を作る》の2つのサブカテゴリーが抽出された。

《赤ちゃんの泣きの意味を分析する》の中で学生は、「言葉では伝えることのできない新生児にとって泣くということは自分の意思表示である。新生児が泣きだすと不安になるのは何を求められているか全く分からないからであると思われる」「新生児にとってみたら泣くという行為が他の人に何かを伝える1つの手段であるために私たち大人や周りの人が泣いているのはなぜなのかというのを感じ取る必要がある」「時間とともに泣き方を区別できるようになった、泣きにもいろいろ種類がある」と記述していた。ここでは、泣くという新生児の行為は、児の意思表示であると捉え、泣きの意味を解釈し、また泣いている具体的な理由や、泣く理由によって泣き方が違っているというように、泣きの意味を分析していた。

また《泣きによって母子関係を作る》では「赤ちゃんが泣く、笑顔になる、の繰り返しにより、母子関係がよくなっていくのではないかとと思われる。赤ちゃんが泣き、自分のとった行動により泣き止むと母親はよかったと思いかわいと感じてくるのではないかと、母性本能も新生児の泣くという行動から産まれてくるのではないかと考えた」「赤ちゃんが泣いたとき母親は揺らしたり、抱きしめたりといろいろな方法で泣き止ませているようだ。赤ちゃんが泣くのはただ空腹だとか、苦痛だとかいう要求ばかりでなく、母子間のコミュニケーションをとおして信頼関係を作るためのものでもあるのではないだろうか」と記述していた。これらの学生は、泣きの意味をコミュニケーションととらえ母子関係を作るのではないかと考えていた。モデルが泣くと泣き止むための行動をし、その行動によって何か反応するということの繰り返しを体験することで実際の母子の関係を作るときと同じであると気づいていた。

このことを述べている学生は、この体験を冷静に客観的に分析し、新生児が泣くという行為の意味だけではなく泣くことは母子関係を形成するために必要な行動であるということに気づいていた。“泣き”の持つ本質的な意味を考え、泣きをマイナスイメージとしてとらえるのではなく母子関係を形成する上でのきっかけとなる重要

な刺激であるにとらえている。こうした気づきのできる学生の感性を評価する必要がある。

4) 【泣きに対処するための方策を考える】

【泣きに対処するための方策を考える】では、泣くことに対して直接的に働きかける方法や援助法を模索し、どのように対応すればよいのかを、育児をする者の立場として、あるいは医療従事者としての立場からその援助方法について考えている。このカテゴリーは、さらに《泣きへの対応・対策をとる》、《心のゆとりを持って対応する》、《育児指導を行うための医療者としての心構え》の3つのサブカテゴリーが抽出された。

《泣きへの対応・対策をとる》として、学生は「新生児を観察することで何に不快を感じているのか理解し適切な援助を行う。不必要な処置は避け静かに穏やかに行う。声かけしながら話しかけながら行う」「新生児は泣くこと以外に表現ができない、そのため泣く時間、泣き方により新生児の必要としていることを判断していかなければならない。泣き方以外に泣く表情等にも目を向けていかなければならない」と記述しており、泣く赤ちゃんへの対応の仕方や泣き止ませるための対策等を考えていた。また、「新生児が泣いたとき不快になっているものはないかチェックしたりミルクを与えてみたりした」「新生児が何を要求しているのか順々に試していった」など泣く原因を考えながら方策を探っていった過程も分析していた。

また、学生は、《心のゆとりを持って対応する》ことの重要性も述べている。「泣きは言葉がしゃべれない新生児にとって重要なサインです。だから新生児が泣いた時は焦らず落ち着いて対応するべきです」「赤ちゃんは言葉が話せない泣くのが当たり前なので神経質にならず一歩距離をおいて寛大な優しい心で接したらよいのではないかと述べ、心のゆとりを持つことが必要であると感じていた。

《育児指導を行うための医療者としての心構え》には、「お産育児を楽しんで行えるような教育をするために医療者はお産の前からの信頼関係を作ることが大切である。そのためにはその人個々の家庭環境にあった指導をすることが大切である」とあり、泣きに対して援助を行うための医療者としての心構えや姿勢について考えている学生がいた。

自分たちが体験した“泣き”への対応により、実際に泣き止んで成功した方法や感じたことについて分析し、

その結果、母親にとって有効だと思われる援助法を導いている。このことは実際に実習の場面で褥婦を受け持ち、看護を行う場合、泣きという現象を冷静にとらえ母親への育児についての指導方法を考えるときの助けになる体験であるといえる。

5) 【世話をし泣き止むことで愛着を感じる】

【世話をし泣き止むことで愛着を感じる】では、学生が泣いているモデルの世話をし、その行為によりモデルが泣き止んだことで安心感を得たこと、それによってモデルに対して愛着を感じたという内容であった。このカテゴリーは、さらに《世話することで泣き止み安心》、《世話することで泣き止みかわいい》の2つのサブカテゴリーが抽出された。

《世話することで泣き止み安心》では、学生は「やはり赤ちゃんが泣き出すとどうしてと思ってしまった。話しかけそうになったり、自然にあやす行動をとっていた。ミルクを飲んだ後泣き止んで私自身安心してほっとした」と表現していた、また、《世話することで泣き止みかわいい》には、「新生児が泣きだすと自分自身も動揺してどうしようと困ってしまう。けれど泣き止み、うれしそうな声を聞いたらそれだけで自分もうれしくなって幸せな気持ちになりました。新生児モデルでもすごくかわいくてあやしているときも自然に声かけをしていました」と感じていた。

演習を開始するとモデルが大きな声で泣くことに驚き、泣き声を聞くことで心理的な動揺が引き起こされる。しかし、泣く原因を理解でき、その世話をしていくうちにモデルが泣き止むと学生自身の心も安定する。そしてそのことによってモデルに対してかわいいと感じるようになる。モデルには表情の変化や動作による反応はないが、世話をすると泣き止むということが繰り返されることの中に相互作用があると学生は感じていた。学生にとってこの体験は、実際に泣いている新生児に遭遇しても何らかの世話をすることによって泣き止んでくれること、不安を感じたとしてもそれを乗り越え、新生児をかわいと思える自分を発見している。

6) 【自分の中に母性意識が芽生える】

【自分の中に母性意識が芽生える】は、育児疑似体験を行うことによって新たに自分の中にある母性意識について気づいたという内容であった。サブカテゴリー《児に対する愛着の芽生え》、《育児に対する自信》、《将来わ

が子を持つことへの期待》の3つが抽出された。

《児に対する愛着の芽生え》では、泣きへの世話、対応をしなくとも「泣くことで愛着がわき、ますますかわいいと思った」「泣き始めたら放っておくことができず、すぐ新生児を抱き上げた。何か別の用事をしていてもそれをやめてすぐ行ってあげなければという気持ちだった」の記述から泣く赤ちゃんに対する愛情の芽生えが感じられた。

《育児に対する自信》として、「このモデルの実習でも実際に新生児のケアでもケアしながらずっと話しかけている自分がありました。私は自分が思っていた以上に愛情を持って接することができたと思うので今後の自信につながったと思います」と述べており、育児に対する自信が出てきた学生がいた。

《将来わが子を持つことへの期待》では、「人形でかわいいと思うということは本当に自分の子どもだったらどんなにかわいいと感ずるのだろうと楽しみになりました」「子どもができたような気分になり幸せを感じた。早く私も赤ちゃんが欲しいと思った」と述べており、自分の子どもができたときのことを想像しながら将来自分が親になることを期待している思いが感じられた。

演習を行うことによって、自分が将来の子どもを持ったときの様子を想像し、そのときの自分の育児の様子を具体的に考えている。モデルと接することによって自然に愛情や母性意識が湧き出ており、学生は将来の育児を前向きに捉え有意義な体験となっていた。

7) 【母親の気持ちを考える】

【母親の気持ちを考える】は、自分の体験を通して生じた思いや感情を、母親としての立場に置き換え、母親にとって育児とはどういうものかを考えながら、育児を通して母親は児とともに成長するということを理解していた。サブカテゴリーは《母親にとって育児はつらいものだと理解する》、《母親として成長する》の2つが抽出された。

《母親にとって育児はつらいものだと理解する》では、学生は「子育てや家事に疲れている母親ならば乳児がいつまでも泣き止んでくれないことで育児ノイローゼや育児放棄、虐待へとつながってしまうのかなと思った」「母親を追いつめてしまう前に何らかの手を打つことが求められる。すべての母親が追いつめられていくわけではないが多くの母親が我が子に対して一時的にでも放棄したくなるような感情をもつのではと予想される」「実際に

家の中での子育てだと母親はとっさに相談できる相手なんて限られているし、もっと不安は大きくなってしまふのだろうなと思いました」など、自分の体験を通して生じた思いや感情を、母親の立場に置き換え、母親にとっての育児のつらい部分を分析することができていた。

一方で、《母親として成長する》姿も分析していた。「母親は児の泣き方で何が原因で泣いているのか聞き分けることができる」と聞いた。児が成長するにつれ母親も育児の上で成長しているのではないかと考える」「母親になると泣き方を聞いて何で泣いているのか原因がすぐわかる」と言うけれど、実際泣き声の違いが分かるようになるのはすごいなと思いました」から、母親は児とともに成長するという事に気づいていた。

学生は自分自身が演習をとおして感じたことは、そのまま母親の気持ちと同様であると考えていた。実際の育児は母親にとってつらい部分はあるが、それ以上に楽しみな部分がある。しかし児がモデル人形であるため泣く、泣き止む以外の反応を児から得ることはなかった。そのため児を泣き止ませることだけが育児の目的であるというようにとらえ、育児の困難性の部分が強調されたと考えられる。育児の困難について理解させた上で実習の場面では育児の楽しさ、母子一緒にいることの意味を理解できるような実習場面の展開が必要であるといえる。

8) 【周囲のサポートの必要性や重要性を感じる】

【周囲のサポートの必要性や重要性を感じる】では、育児を行うためには母親だけでは不十分であり、さまざまな人や周囲からのサポート、育児の環境を整えることの必要性を感じていた。サブカテゴリーは《友人のサポートの重要性》、《家族のサポートの必要性》、《経験者や母親同士の助け合いの必要性》、《社会のサポートの必要性》の4つが抽出できた。

《友人のサポートの重要性》として、「周りにいる友達があやしてみれば、やなかなか泣き止まないね、など何でもいいので言葉がけてくれ、そばにいてくれるだけで安心できた」「誰か世話を交代してくれる人がいれば少しでも軽減すると思った。実際泣き続ける人形を友達に預けることで気持ちが楽になった。一人で家に閉じこもって世話をするのではなく誰かに相談し少しの間だけでも代わってもらうことで新生児の世話への不満、悩みを解消できると思う。友達同士話をしながら世話をしただけで泣き続ける児へのイライラが解消できた気がする」などの記述より、友人のサポートの大切さを感じて

いた。

《家族のサポートの必要性》では、「育児を行う上で精神的なストレスや悩みを感じない人はいないだろう。誰も1度は壁にぶつかると思う。そういった場合には祖父母や夫など信頼できるよき相談相手が存在していることが重要であり、一人で思い悩まないよう家族がサポートする必要がある。また社会資源を活用したり育児サークルに参加したりすることもよいと思われる」「母親は一人で育児をせずに家族等周りにいる人の手助けが必要だと思った」「母親の役割という意識を取り除き父親の協力、父親との共同作業がいかに重要かを改めて感じることができた」など、家族のサポートの必要性を感じていた。

また、《経験者や母親同士の助け合いの必要性》も考えていた。「育児のストレスを軽減するためにも両親学級や育児教室で積極的に話し合ったり同じ境遇の母親同士で話したり育児経験者にアドバイスしてもらおうといった工夫が必要になると思う」と、育児について経験者からのサポートも必要であると考えていた。

《社会のサポートの必要性》は、「悩んでいることがあれば子育ての経験のある人に相談し、順調に子育てができるんだろうなと思いました。もしも近くで重要他者がいない場合は、助産師さんや保健師さんが心理的サポートを行うことが大切だと考えられます」「母親が基本的に育児を行うが心理的援助をして行くことはすごく大切なことである、最近虐待のニュースが多いことも考慮すると援助活動も増やしていかないといけないのかなと思う」と述べているように、医療従事者からのサポートも必要としていた。

演習中に友人の声かけなどで助けられると、実際に育児をする上で他者からのサポートの重要性を身をもって経験できたのではないかと考えられる。サポートを提供する相手によって求める内容が異なっていることから、学生は自分が医療従事者として母親にどのようなサポートが提供できるのか考えるきっかけになっていた。実習の場面で接する対象は病院に入院している状態であるが、実際にはそれらの対象者は地域へ帰っていき自分たちのコミュニティの中での生活を始める。その時に退院後の育児についてのサポートを考える上で今回の演習は効果的であると推測された。

3. 学生の気づきの特徴

1) 学生の感情の変化による成長

【泣きからわき起こる不快な感情を味わう】【世話をし泣き止むことで愛着を感じる】【自分の中に母性意識が芽生える】の3つのカテゴリーから学生自らの感情の変化についての内容が発見できた。新生児の“泣き”という現象から自分自身の感情がどう変化しどのような気づきがあるのかが考えられていた。自己を冷静に洞察することは自分がどのような人間であるのかという問いに自ら向き合うことになる。このことは学生自身の精神的成長を促すことになるのではないかと考えられた。また今回、特に新生児の“泣き”に対する学生自身の体験は、学生が将来子を育てる立場になった時の予測的な体験としても重要な意味を持つ。田中⁴⁾は、子どもの気質認知が肯定的だった母親ほど育児適応が高かったと報告している。学生がモデルとはいえ新生児の“泣き”について体験したことは将来母親になったときに子ども気質について冷静にとらえられることへの助けになる可能性があるといえる。

2) 対象理解の深まり

【育児の難しさを実感する】【泣きの理由と意味付けを考える】【母親の気持ちを考える】の3つのカテゴリーからは母親や新生児についての理解の深まりに関する内容が導きだされた。学生は新生児が泣くという現象の体験をとおして母親、新生児の理解について学習が深まったと考えられた。学生は“泣き”によりさまざまな感情を体験し、その感情を冷静に分析することによって、さらに考えが深まっている。新生児の泣きに対応しているのは学生自身である。母親の立場、新生児の立場と対象者の立場に立って考えており、学生は母親にとっては“泣き”が育児をつらいものにさせている要因になると取らえている。しかし、“泣き”は母子関係形成のための意味ある刺激であると解釈したり、新生児にとっては自己の欲求や母親の愛情を得るためのサインであり、母子のコミュニケーションであるというように対象のとらえ方に幅ができ理解が深まっていた。

3) 看護者としての視点をもつ

【泣きに対処するための方策を考える】【周囲のサポートの必要性・重要性を感じる】からは看護援助についての内容が導きだされた。学生は“泣き”という現象を体験する中で看護師としての視点をもち冷静に看護援助に

ついて考えられていた。新生児の“泣き”を予測することによって育児をスムーズにすることができると発見している。また母親が相談できる身近な存在としての医療者の必要性なども理解していた。つまり学生自身が“泣き”の体験をすることで精神的に追いつめられるような感覚に陥りながらも、看護の視点を見失うことなく援助の方法について考えられていた。このことから、新生児モデルを活用した“泣き”の演習は看護者としてのアイデンティティの形成を促進する意味もあるといえる。

4. 演習における学習効果と実習指導への適用

少子化社会の中で小さな子どもとふれあう機会の少ない看護学生にとって新生児モデルの世話をするということは短時間であっても新鮮で印象深い体験であったと推察される。濱らは⁵⁾看護学生の対児感情は講義から演習、特に沐浴演習時に高まる方向で推移したと報告しており、実際に新生児モデルにふれ看護技術を行うことで対児感情が高まったと報告している。学生自身が育児疑似体験を行うことにより母親となる女性の心理を実感し、児に対する愛着を感じることができると、その体験に基づき看護者の視点で対象を理解することができるようになるのではないかと推察された。これは講義だけでは得られない学習効果である。

また学生の中には“泣き”について不快な感情や否定的な感情のみの気づきではなくその否定的な感情からさらに母親の立場、新生児の立場まで視野を広げ、理解を深め考察できている学生もいた。しかし一方では不快な感情からわき起こる育児に対する否定的な思いや自己の将来に対する不安が生じ、対象者の理解まで思いが馳せられない学生もいた。学生は今まで育った養育環境や小さな子どもとのふれあい体験、きょうだいや家族との関係、個々のパーソナリティに関してさまざまな特徴を持っている。したがって同じ状況設定の演習であっても対処の仕方、感じ方などが異なる。学生の特徴を把握し、学生の気質傾向に合うような実習指導をするための資料として今回の研究結果を役立てることができると考えられた。

今後の課題と研究の限界

本研究は A 大学医療技術短期大学部 3 年生の 40 名の

レポート内容を分析して得られた結果である。今回は個々の学生がどのような感情の変化を体験し、どういう理解につながったのか個別に内容を分析しているものではない。さらに研究に参加しなかった学生については演習内容に消極的であったため研究参加に同意できなかった可能性がある。したがって、研究への参加の可否の時点で参加者の気質に生じるバイアスは否定できない。

今後の課題として個々の学生の心の動きに焦点を当てた分析をすることにより、もっと具体的な実習指導のあり方を考案する必要がある。

結 論

母性看護学演習で新生児モデルを使用し育児模擬体験学習をし、新生児の“泣き”に対して看護学生の気づきについての内容を分析した。その結果、【泣きからわき起こる不快な感情を味わう】【育児の難しさを実感する】【泣きの理由と意味付けを考える】【泣きに対処するための方策を考える】【世話をし泣き止むことで愛着を感じる】【自分の中に母性意識が芽生える】【母親の気持ちを考える】【周囲のサポートの必要性や重要性を感じる】の 8 つのカテゴリーが抽出された。

文 献

- 1) 濱口幸美, 池田浩子, 宮崎つた子 他: 母性看護学における妊婦体験学習の効果, 三重看護学誌, 3(2), 33-40, 2001.
- 2) 岡田由香, 岡田奈純, 布原佳奈 他: 養護性を高めるための教育教材の活用—育児疑似体験人形の教育効果—, 日本看護研究学会雑誌, 25(3), 409, 2002.
- 3) 西海ひとみ, 喜多淳子: 第一子育児早期における母親の心理的ストレス反の(第1報)—育児ストレス要因との関連による母親の心理的ストレス反応の特徴—, 母性衛生, 45(2), 188-198, 2004.
- 4) 田中和子: 育児適応に影響を与える要因の検討, 母性衛生, 47(4), 554-561, 2007.
- 5) 濱 耕子: 母性看護を習得する学生の胎児感情の推移と関連要因, 母性衛生, 45(2), 170-187, 2004.

What are nursing students aware of “crying” through simulated nursing training using a crying neonatal model ?

Tamae Sahara, and Sachi Kishida

Major in Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan

Abstract The purpose of study was to clarify nursing student's experience changes to a newborn infant crying through simulated nursing training using a newborn infant model in her awareness. Subjects were 3rd grade forty female students at three-year nursing college. A writing and oral request to participate in the study was made to the subjects by the researchers. Students reported that “how my emotion has changed”, and “what I have learned?” by this simulated nursing care experience. We analyzed the nursing students' report after this nursing training using qualitative method. Analysis of qualitative data revealed eight categories of response, which were labeled: (1) ‘stirring uncomfortable emotion’, (2) ‘realization of child-care challenges and difficulties’, (3) ‘consideration of meaning and reason to cry’, (4) ‘thinking of strategy to cope with crying’, (5) ‘maternal and emotional attachment’, (6) ‘consciousness of maternal affection in herself’, (7) ‘empathy for the feeling of mother’, (8) ‘consideration of importance and need of support from others’. Nurse educators can facilitate more effective education to promote student's technological competency for child and maternal care by knowing the contents of students' self-awareness.

Key words : crying baby, simulated nursing practice, nursing student, awareness, education